

参勤交代道の本山関係部分について

(参考資料 土佐の道 その歴史を歩く 他)

■北山道（官道）地図



■本山町域から川口送り番所まで

(参考資料 土佐の道 その歴史を歩く 他)

おけいの岩

道に面した岩の下部に窪み。岩屋状になっている。

昔、本山の古田（国見山の北麓）に「おけい」という剛胆な女性がいて、高知城下へ出たの帰り道が暗くなっても国見峠越で帰ったという。ある晩、この岩屋で火を炊き、おけいが着物を脱いで、髪を直している時、その姿を見て怪物と思い、驚いて逃げ始めたので「怖じることはない、古田のおけいじゃ」と告げて以来、この岩を「おけいの岩」と呼ぶようになったと伝えられている。

(雑木林が美しい、道も平坦で前方に国見山の山容が見える。)

坂を登り切り林道へ 林道に並行して左に参勤交代路が見える。

赤荒分岐

本山方面、赤荒峠方面への分岐。

峠近くには殿様道の看板が立っている。

国見峠（1030m）穴内の登山口から 4600mの登り道もここで終わり。

物資の輸送にあたる送夫たちの苦労が察せられる。

峠を越えれば本山泊まり。

本山からの国見山への登山口は従来本山町吉延であり、参勤交代路が登山道として利用されていた。

国見の石垣

国見峠から北にむかう峠道は緩やかな弧を描いて下っている。

まもなく急坂となり、さらに深い谷状となって兩岸が小山のように高くなっているところもある。国見の石垣はさらに下った下方にある。埋め立てた道である。すぐ西の杖ヶ森との鞍部にあたり、長さ 20m ほど。上り下りの道を緩和するため、土石を積み上げ、平坦な道に改良したもの。江戸中期の山地道路改良工事の跡。別名「殿様道」

急峻な道はこの辺りまで。後は比較的なだらかな坂道が、吉延にむかって下っている。

水の本

杖ヶ森（1019m）の東肩を迂回して進むと「水の本」と名のある湧き水地点がある。昔は冷水が湧きでており旅人の喉を潤した格好の水場であった。

やがて下方に林道が現れ、旧街道は寸断されている。部分的に悪路になっているが旧態は残る。

腰掛石

「腰掛石」を過ぎると下方に集落が見える。

大休場（おやすば）

山中にしては広い平坦地で、水場もあり、大休止の場所となっていた。上り、下りの隊列を整えた場所。宿屋、店など数軒建っていたといわれる。「天菊茶屋」というお茶屋があって旅人を遇したと言われている。現在はその所在を知らせるのみ。ここを少し下ると吉延の集落に入る。

阿弥陀堂

街道筋には古い灯明台がみえ、阿弥陀堂が建っている。

オリドの杉と乳銀杏

樹齢約千年といわれるオリドの杉と古木の乳銀杏

参勤の道は檜ノ川を渡る。現在は橋が架かっているが、橋の上手に飛び石と思われる渡渉点が見える。対岸は大石

見渡地蔵

檜ノ川の両岸に残る地蔵（嘉永6年）

大石

寛永年間（1615～63）に野中兼山が設計したという取水堰や灌漑水路が見られる。

本山に回り込んだ道筋には高さ9m、幅18mの大岩がある。参勤道は本山町の南上方を通り、土居屋敷跡（本山御殿）に入る。

十二所神社

土居屋敷跡（本山御殿）

本山出発

下津野より渡津（わたづ）に渡ったという説。

下手の上関説。

上関まではおおむね現在の国道に沿って東進。本山東大橋の下流を舟で対岸へ。吉野川は大河で架橋ができず、もっぱら舟での渡河によった。

上関の渡舟場

上関には渡舟場を示す「上関の笠地蔵」があり、南岸には見渡地蔵が立っていたようである。

上関には北から「行川」が流れ込む。

笠地蔵の隣の屋敷跡は渡守の家跡といわれている。

本村

山下家

正面に正門を構え、見事な石垣が並んでいる。延長約 100m。石垣の下端に並行して石畳の道が築造されている。参勤交代の道といわれ、藩主の休憩所にもなっていた。

山下家を出て東へ約 300mの地点に尾根の張り出した個所があり、旧道は尾根を横断している。（堀切道）

後はおおむね現在の磯谷・本山線を進んでいる。

葛原

久保家で休憩。

現在の「川口大橋」の北詰めを過ぎて「川ノ江・大豊線」に入る。

川口送り番所

「新川口橋」下流の立川川の渡しを渡り対岸へ。南岸の国道筋に比べると旧態が残っている。「川口」には「長瀬茶屋」があり、藩主の昼食場となっていたので「川口御殿」とも呼ばれた。

これより立川川の左岸を北上。

この道は一般庶民の道でもあって、伊勢参宮や金毘羅信仰のため多くの人が往来した街道でもあった。